

今日も5時半、仕事が終わる。オフィスの窓から眺めるきれいな夕陽。いつもの景色。おれはいつものように会社を出て家に帰る。帰り道はわからない。わからないがなぜだろう、導かれるように家に着く。電車に乗る。地下鉄に乗る。バスに乗る。右に行く。左に行く。北へ行く。南へ行く。郊外のきれいな一軒家。商店街を抜けた小さな木造の家。公園の隣の大きな平屋。こんな生活をもう何年続けているのだろう。そもそもなぜこんな生活が始まったのか。全く思い出せない。

今日はこのうちか。初めての家。ドアを開ける。「ただいま」。「おかえりなさい！早かったね！」

初めて見る顔。「パパ！一緒にお風呂はいろうよ！」「そうだな」かわいい子供たち。

「この前食べたって言ってたチョコケーキみつけたから買ってきたよ！」「ありがとう」優しい妻。なぜかいつも違和感なく家族の一員になっている、らしい。

家に帰ってから寝るまでの3.4時間の平和な時間。家族のことは何にも知らなくても上辺だけのやり取りで穏やかに過ぎていく。そして翌朝家を出ると永遠に会わない家族。おれ以外の家族は明日もこんな日常が続くらしい。深くかかわらない寂しさもなくはないが、煩わしさのないこの穏やかな生活も悪くない。おれはたぶん何らかの理由があってこの生活を始めたはずだ。いい選択だったと思ってる。今日の夕方はどこの家のどんな家族なのだろうか。特に楽しみではないけれど、ずっとこの生活が続いて欲しいと願ってる。

駅からバスに乗り換えて、今日も家に帰る。初めての家へ。

「ただいま」「おかえり！」いつもの穏やかな時間。そして翌朝、いつものように永遠のお別れ。

「今日パパ、誕生日だよ。何か欲しいものある？」と優しい妻。「なんにもいらないよ」と永遠に会わないおれ。いつもの家族ならちょっと不満気でも「そうなのー」で終わる。はずだったのに。「今回は子供たちもパパのためってはりきってるから！」なかなか引き下がらない。「じゃあみんなで焼肉しようか」と、ついってしまっておれ。未来の約束。「楽しみだね！何時に帰ってくる？駅に迎えに行く？」

なんだろう？今まで平穏だった心がかき乱される。もう帰ってこないのに。楽しそうな家族に嫉妬しているのか、愛情なんか別に欲しくないはずなのに、実は熱望しているかも知れない自分に気が付きそうで困惑してしまっただのか。胸の奥から粘ついた感情が吐き出される。

「うるさい！」

ドアを開けて速足で歩く。昨日の帰り道とは違う道。何年かぶりに味わうリアルな感情が一気にあふれる。ふと気が付けば見慣れた道。よみがえる記憶。そうだ、今度こそ本当の自分の家に帰るんだ！信号を渡り角を曲がり、そして嬉しくなって古びてしまったドアに手をかける。「ただいま！」

瞬間、胸を喉を締め付けられる。声もでない。動けない。こっちを見てる懐かしい目。あの感覚。逃れられない。思い出してしまったあの日々と、壊してしまった今日の後悔。その目がさらに容赦なく締め上げる。もう体も心も何も感じない。

「昔は男の子のいる家族が住んでいましたよ、よく外で泣いてたけど。まさかまだここにね」

毎日「ただいま！」って違う男がかえってくる。やさしい夫。子供も可愛がってくれるし
適当に話もしてくれる。穏やかと言えば穏やかな日々。物足りないといえば物足りないが
それでいいと思ってる。深く入り込まないからトラブルもない。

毎朝会社に送り出しておわり。寂しさもあるけど、夕方にはまた別の人が帰ってくるし。

そう思ってたのに。その日は夫の誕生日、だったらしい。子供たちが何やら相談していた
から。

つい。「誕生日、何が欲しい？」「いらない」そこで終わりにしても良かったんだけど。

その人が優しかったからつい。また帰ってきてくれるような気がして。

「うるさい！」胸の奥にハンマーを叩き落される。出ていく男。粉々にくずれていく私。
暗い中でもキラキラ光るちっちゃなパーツを必死で探して慎重に積み上げて。絶対に崩れ
ないようにしっかり重ねて。もう大丈夫！そう思ってここまで来たのに。たった一撃で。
玄関には灰色の砂粒の山。